

長谷川 隆一（早稲田大学文学学術院助手）

「後漢における二人の王氏

——性三品説下における「君主＝聖人論」・「君主＝非聖人論」の典型として」

後漢時代の思想家の根底には、人間観の前提として性三品説という考え方が存在した。性三品説とは、人間を上智・中人・下愚の三に区分し、上と下は移らず、中人のみ上智の教化に従い移ることができる、というものである。この最大公約数的な定義は、おそらく多くの人が承認するものであろう。しかしながら、性三品説は誰でも知っている枠組みではあるが、これまでの思想研究の中で、あまり正面から検討されてはこなかった。そのような状況の中、幅広い時代の性説と性三品説の関わりを取り上げたものとして池田知久氏の研究があり、性三品説の展開を現実との関わりで読み解いた渡邊義浩氏の研究がある。ただ、両者の論考は性三品説研究において重要ではあるが、共通の問題を有している。それは、そもそも性三品説とは、聖人の教化により、性を善に向かわせることができるものだという建前をどのように捉えるべきかについて、あまり意識されていないことである。本報告では、この問題を考えるために、後漢時代にいきた二人の王氏——王充と王符——を取り上げる。『論衡』を著した王充は、現実には聖人である皇帝が存在し、その教化を受けることにより極悪でない人の性を善に向かわせることができるとした。対して『潜夫論』を著した王符は、聖人は現実に存在せず、中人は経典を通じて聖人の教化を受け、賢人になれるとした。このように、彼ら二人は共に性三品説の支配下にありながらも、教化を受ける論理を異にしている。この差違に着目した上で、前者を君主＝聖人論、後者を君主＝非聖人論と結びつけた性三品説という二つに分類し、この差違の発生原因と、彼らの生きた時期において、どちらの方がスタンダードな立場であったのかを指摘する。これにより、従来あまり指摘されてこなかった後漢諸子の思想の一端を示すことを目指す。